

白山ふるさと文学賞

第九回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

母への思い

翠星高校一年

宮下 みやした

いろ葉 は

現在の日本では、親から子への肉体的虐待がテレビ番組に取り上げられる機会が増え、特にその中でも、ニュースになるようなものは、死亡事件に至る痛ましいケースが多い。インターネットで調べたところ、肉体的虐待が起こる原因の多くは、精神的・経済的困窮にあるらしい。が、私の母はこれを

「そんなのは、理由にならない」

と一蹴した。私は母の言葉に耳を疑った。わが家は、私が2歳を少し過ぎた頃に母子家庭になり、さらに母には持病もあるから、経済的に余裕があるとは、お世辞にも言えない生活を送っている。その中で、虐待ではないが、母の理不尽な言動を辛く感じる時期があった。だが私は、それらは全て、母のせいではなく誰のせいでもない、精神的・経済的困窮のせいであつたと思い、深く考えないようにしていた。当然母も、あれらのことは全て自身のせいではなく、状況が悪いせいだつたと思つているだろう、と私は考えていたので、母のその「そんなのは理由にならない」という言葉に意表をつかれた。「そんな理由にならない」は、言い換えると「全て自分のせいだ」と捉えることができ、つまり母にとつては自責の言葉のはずだ。普通、人は自分の非を認めることは、とても勇気が必要で、苦しいことだ。なのにその言葉を、迷わず言つて見せる姿を見て、私は母の責任感の強さに気づいた。今、思い返してみると、母はどれだけ疲れて辛そうにしているも、私のご飯の用意は毎日欠かさずにしていた。人によつてはごく普通の、当たり前のことかもしれないが、私はあの頃の母の状態を誰よりも1番近くで見ていたから、それがどれだけ大変なことか、少しは理解できているつもりでいる。母が私のためにしてくれていることは、ご飯の用意だけではなく、外に働きに出たり、洗濯、洗物等、その他も細々としたことも含めると、数えきることができないくらいだ。私が今、母と同じことをしろと言われても、きつと3日と続かないだろう。その証拠に、母が手術のために3日間入院をした時、その間の家事も私が請け負つたのだが、なんと、2日目には掃除を、

3日目には洗濯をすっぱかした。面倒くさがり屋の私の体験談だから参考にならないかもしれないが、家事というのは、そうしたくなるほど大変な作業なのである。そして改めて書くと、母には持病がある。ただでさえ大変なのに、母の辛さや疲労は、1番近くで見ている私にも、到底はかり知ることができない程だろう。なのに何故、私のためにここまでしてくれるのかを考えると、胸が熱くなる。

母は、私と自身の関係を「親子というより、なんでも話すことができ、友達みたいだ。」と言う。私も、母との辛い時期を乗りこえ、お互いの胸の内を話し合い、より一層仲が深まったように感じる。あの頃のこと、今ではすっかり笑い話だ。

もし過去に手紙を1通届けられるとすれば、私はあの頃の私に、今の私と母の関係を伝えたい。そして、現在の母には、感謝を伝えたい。

